



Title	空間を表す形式名詞の意味と機能
Author(s)	方, 允炯
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49407">https://hdl.handle.net/11094/49407</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【8】

氏 名	方 允 炯
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 2 4 3 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 20 年 9 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当 文 学 研 究 科 文 化 表 現 論 専 攻
学 位 論 文 名	空 間 を 表 す 形 式 名 詞 の 意 味 と 機 能
論 文 審 査 委 員	(主 査) 教 授 工 藤 眞 由 美 (副 査) 准 教 授 洪 谷 勝 己 教 授 田 野 村 忠 温

#### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、空間を表す形式名詞「うえ」「した」「もと」、「まえ」「うしろ」「あと」、「うち」「なか」「あいだ」を取り上げ、文学作品等から収集した事例に基づいて、共時的ならびに通時的な観点から、各形式における文法化の違いを体系的に明らかにしようとしたものである。本文 125 頁、400 字詰め原稿用紙換算 450 枚よりなる。

序論では、先行研究を精査した上で、「もの」「こと」「わけ」「はず」等のモダリティ形式化する形式名詞に比べて、従来の研究において手薄であった、空間を表す形式名詞の意味・機能上の変化プロセスを明らかにすることが研究目的であると述べる。対象とする 9

つの形式に共通する文法化が進んだ段階について、名詞接続の場合を「後置詞化」、動詞接続の場合を「接続助辞化」と仮定し、一貫した記述を試みている。

第1部では「現代の共時的記述」を試みる。

まず「上下関係を表す形式名詞とその文法化」では、「うえ」「した」「もと」を取り上げ、空間的意味を有している場合は、格体系が整っていることから形式名詞と位置づけられるが、その空間性が漂白されるに従って、「～に」「～で」に限定されつつ後置詞化や接続助辞化が進み、時間、添加、前提条件等の文法的意味・機能を担うようになることを記述する。類義形式「した」「もと」では、文法化の有無における違いがあることも明らかにしている。

次に「前後関係を表す形式名詞とその文法化」では、「まえ」「うしろ」「あと」を取り上げ、上下関係を表す形式名詞の場合と同じ観点から記述を行った上で、文法化のプロセスを考察するにあたっては、前接する名詞のタイプと動詞のタイプ、述語のタイプの変化に注目することが重要であると述べる。

第2部では「明治期と現代との比較」を試みる。「うち」「なか」「あいだ」について、現代と明治期との使用実態を比較した上で、明治期では空間的意味を表していた「うち」が現代ではその意味を失いつつある等、両時期の間には、類義形式間の張り合い関係の変化があり、現代の方が機能分担が進んでいることを明らかにしている。

最終章「結論と今後の課題」では、本研究が明らかにできたのは、①形式名詞、後置詞、接続助辞の相互関係、②通時的な変化、③空間を表す形式名詞の相互関係の3点であることを総合的に示した上で、今後の課題として、文法化のプロセスに関する理論的、実証的な深い考察がなお必要であることを述べている。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文は、先行研究において手薄であった空間を表す形式名詞の文法化のプロセスについて、実例を丹念に収集した上で、共時的分析ならびに明治期と現代（1970年以降）の使用実態の比較対照を行った労作である。

文法化のプロセスの考察において、格体系が整っている場合を「形式名詞」、格体系が消失した場合を「後置詞化」（名詞接続）、「接続助辞化」（動詞接続）として分けた上で、名詞や動詞のタイプおよび述語のタイプの両側面に注目することによって、一貫した、精密な記述を試みていることが本研究の最大の貢献である。また、空間的意味を有する反義、類義形式を取り上げ、文法化のプロセスにおける共通点と相違点を、できる限り体系的に明らかにしようとした点も評価できる。

惜しむらくは、事実の指摘に留まり、本論文のキーワードとなる「後置詞化」「接続助辞化」についての厳密な規定が不明であることから、なぜそうなっているのかの説明が不足していると思われる。この点は「文法化」という現象をどのように理論化するかとも関係し、名詞接続から動詞接続へという進展プロセスを考えるのかどうかという問題をはらん

でいると言えよう。また、体系的考察を目指してはいるが、一口に「空間的意味」と言っても、そこには各形式ごとの違いがあるはずであり、出発点の意味としての空間性の違いを精密に捉えておかなければ、文法化の方向性の違いを説明することが不可能になると思われる。同時に、動詞接続の場合だけでなく、形容詞やコピュラに接続する場合も視野に入れなければ、総合的考察になっているとは言い難い。

本論文は、このような未完成な部分を残してはいるが、部分的な用例だけに基づく安易な解釈を許さない興味深い事実を提示し、今後開拓していくべき諸問題を提起した点で積極的評価が与えられるものとなっている。分析対象とする空間を表す形式名詞の範囲を拡張、日本語における文法化についてその歴史的過程を明らかにしつつ、著者の母語である韓国語との比較対照が行えるようになる可能性を有した論文であると判断した。

よって、本論文は、博士（文学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。